

Preface

巻頭言

人道的介入の両義性を問う試み

研究科長 内藤正典

同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科は、2011年、2012年の2回にわたって *Asian Perspectives on Humanitarian Interventions in the 21st Century* (21世紀の人道的介入におけるアジアの視点) と題する国際会議を主催した。この会議は、本研究科が UNESCO Chair となっている *Sustainable Human Security and Capacity-building in Post-conflict Societies* (紛争後社会における持続的な人間の安全保障と平和構築) の一環をなすものである。この特別号は、2回の国際会議の成果としての論集である。

グローバル・スタディーズ研究科では、その教育・研究活動において、テーマを定めて国際会議を実施している。会議は、内外の専門家による報告・討論と、それに続く学生セッションから構成される。学生も、本会議と同じテーマについてグループを構成して報告を行い、論理性と現実性の双方について、国際会議参加者の専門家から評価を受けるのである。国際会議を研究科の学位プログラムのなかに位置づけることによって、最先端の学術的成果を学生の教育に還元することをめざしているのである。

グローバル・スタディーズ研究科は、その名の通り、今日の世界が直面する諸課題に取り組むことを教学の支柱とし、同時に、地域的文脈による多様性を重視している。2012年6月に開催した国際会議では、引き続き翌日にアフガニスタンの和解と平和構築を開催したが、この会議は、政府側のみならず、反政府側からタリバンが公式代表を派遣するという画期的な会合となった。

2010年の開設後、前 UNESCO 事務局長補(人文・社会科学セクター)ピエール・サネ特別招聘教授を迎え、同教授が2度の国際会議を組織した。サネ特別招聘教授は、元 AMNESTY INTERNATIONAL の代表をつとめ、人道的介入、保護責任を主たるテーマとして充実した国際会議を組織した。同時に、学生セッションの運営と組織についても卓越した指導力を発揮し、学生に刺激を与えつつ、彼らの国際舞台での実践力を飛躍的に向上させた。ここに記して、感謝の意を表したい。

大学院教育の高度化とグローバル化には、実務家、海外からの招聘教員の貢献が大きい。ただ、それは大学での学位プログラムとの有機的連携が十全におこなわれる場合において、一層の効果を発揮する。本研究科で UNESCO との連携を重視したのは、日本ユネスコ国内委員会委員の中西久枝教授、UNESCO 生命倫理委員会の委員長をつとめた位田隆一特別客員教授、ユネスコ日本政府代表部で専門調査員をつとめた見原礼子助教（現在、高等研究教育機構准教授）そして、私自身も UNESCO 人文・社会科学セクターの学術諮問委員をつとめていたことが関係している。

グローバル・スタディーズ研究科は、2012 年度に文部科学省大学院博士課程教育リーディング・プログラムに採択された。このプログラムの枠組みのなかで、今後も、国際会議を開催し、大学院生の国際舞台での活動を支援していく。